〔2〕社　会　科

社会科における教科構造の検討

織田長繁　中尾正三　都築　亨
高森　充　加藤佳孝

序　論

中等教育における社会科の科目或いは分野として，地理，歴史，政治，経済，社会，倫理などの相互関連と全体構造への位置づけが問い直されねばならない。一つは，分野・教科目の構成が，他の面では内容編成と指導の形態が，つまり全体として社会科教科構造の検討が要求される。

「風にそよぐ社会科」――戦後教育課程の変遷をふり返ってみると，教科としての社会科の性格と役割は余りにも不安定であり，時の社会的・政治的状況のままに推移していることがわかる。今簡単に戦後の社会科の歩みを，小・中・高校を含めて，限られた視点（学習指導要領改訂の要点と社会科の変容）でまとめてみると次の表のようになる。

第 1 表

年　度	改訂の要旨・特色	分野・教科目構成	カリキュラム構成
1947(22) 補説を含む	「小学校学習指導要領補説」(23年）で単元展開方法を手引きし，単元の基底と内容を示す（試案）	修身・公民・地理・歴史の総合による，社会への多面的接近と取扱い ・小1～高1（第10学年）まで総合一般社会，高2～高3で日本史，東洋史，西洋史，人文地理，時事問題各5単位2科目選択	◦すべての教科の中心的教科（コア・カリキュラム的発想） ◦社会機能の観点から単元を設定，高校についても大単位，大単元主義
1951(25)	社会科の目標を整理し，広域教科としての社会科を整備 ・道徳教育の観点を導入 ・手びきとしての基準（試案）	◦地理・歴史的観点の明確化（小学校） ◦中1・地理，中2・歴史の色彩強まる ◦高1・一般社会，高2・3・日本史・世界史・人文地理・時事問題（2科目選択）	◦広域統合教科，生活中心主義，社会機能法によって単元を整備 ◦問題解決学習と単元学習の統一をはかる
1955(30) 高校は31年	地理・歴史の系統学習を重視し，内容を精選，道徳教育を重視し，社会問題への深入りを回避 ・基準性強まる	◦中学校における地理・歴史・政経社の各分野の相対的独立 ◦人文地理，世界史，社会，日本史（各3～5）社会を含めて3科目必修	◦教科の統一性弱体化 ◦社会機能法の修正 ◦問題解決学習から系統学習へ移行
1958(33) 高校は35年	◦道徳の特設，地・歴の強化 ◦科学的批判精神より道徳的判断 ◦国家基準として官報告示	◦地理・歴史分野の分離（小学校） ◦中1・地理，中2・歴史，中3・政経社 ◦高校（類型別）Bの場合，高1・地理，高2・倫社，高2～3・世界史・日本史，高3・政経	◦教科の統一性ほとんどなし ◦科目別系統主義の立場で教材編成 ◦系統学習(単元学習の形骸化)

1969(44)	◦「公民的資質」形成の重視，神話の復活 ◦天皇についての理解と敬愛 ◦国家基準と教育課程管理	◦中1・2で地理・歴史の併行 ◦中3で公民的分野 ◦高校・倫社・政経（各2単位必修）日史・世史・地理A・B（各3単位）2科目選択必修	◦社会科学より道徳教科的性格 ◦社会科の解体（？），公民科の復活

ここでは各改訂年次の社会的，政治的背景はあげることができなかったが，その余りにも激しい変容の過程を一瞥することができよう。成立当初の ①広域統合教科としての中心的（コア的）教科 ②生活中心，社会機能面からの単元構成原理 ③積極的，主体的な問題解決学習，そして何よりも，平和と人権と民主主義の教育目標が次第に後退していった様態を読みとることができる。

所で，このような流れに対して，私達はどのような実践と研究を行ってきたか。詳細は「学校紀要」その他の研究物にゆずるが，一応次のようにまとめることができよう。

(1) 学校創立～（1954まで）……本校にとって創設期，新教育の実践と批判の視点で「単元学習とその指導」(社会科における導入や単元学習の評価」をとりあげている。

(2) 1955～'59……主として，「生徒の社会意識の分析と指導」「社会科教育におけるマス・コミの問題」及び「教科書の分析」

(3) '60～'64 「学習困難点の分析と指導」を出発点に，「社会科における学習過程の研究」。特にこの時期に，戦後社会科教育の重要な学習形態及び原理とされてきた問題解決学習への反省と，ようやく台頭してきた系統学習論の批判的摂取の上に「課題解決学習」の実験的試みを手がけた。この学習形態は当時校長であった広岡教授の指導の下で行われたが，その後，広岡教授の主張は，教材の構造化と方法の現代化，科学のすじ道と，児童・生徒の主体学習をきり結ぶ「発見学習論」として展開されている。これに対して私達の実践研究は，中尾教官の「倫社教育の実践的研究（第1報告，'60～第8報'68）に見られるようにじっくりと教科の本質と指導のあり方の追求に向けられた。

(4) '65～ 教育内容と方法の改造に関連して，教科構造の問題を手がけている。ここで私達の主要関心は，広く「後期中等教育の問題」を分析する中で「青年期教育における社会認識の発展と人間の形成とは何か」を考えたいと思った。従って教科研究と並んで，中尾・都築・高森の特殊研究の関心領域が，「近代化日本における教育政策史と教育実践のかかわり」に向けられ，戦前の旧学制下における，実業補習学校の公民教育や，旧制中学校における修身・公民科の歴史の研究が手がけられた。特に中尾教官のすぐれた研究は，実教懸賞論文「倫社教科書論」としてまとめられている。

所で，以上のような研究の経過の中で，社会科は外国や，学者の権威の借りもの，いわんや，権力の教育課程政策のお先棒をかつぐことになることであってはならないと思う。しかし，結果としてそのような危惧が杞憂でないことが明らかになりつつある。

昭和43年6月，教育課程審議会は文部大臣に対し，「中学校教育課程改善の答申」を行い，これに基づいて，文部省は「中学校学習指導要領」の全面改訂を行ない，新教育課程の実施を，昭和47年度からときめている。引き続いて，高校についても，44年3月「中間まとめ」が9月30日その「答申」が行われ，48年度からの実施が予定されている。こんどの改訂は既に昭和41年10月に中央教育審議会が出した「後期中等教育の拡充整備について」と「期待される人間像」の答申に忠実に従い，そのルートの延長線上に位置している。この線に沿って，中学校社会科政経社分野は公民的分野に改変され，高校についても，倫社は著しく道徳教科の色彩を強め，政経も又，かって昭和6年に登上した中学校公民科（修身と並ぶ）への傾斜が意図されている。

かって，「公民教育」は在野の中で――戦前の差別的学校体系の中で，最も傍系的な大衆教育の機関――実業補習教育及び，ムラ共同体を基盤とする，農村の青年会＝青年団の教育から芽生え，大正デモクラシーとその後の社会運動の激化，やがて日本資本主義の全般的危機の中で完全に権力の教育政策に吸収されていったものである。普選を背景とする〝公民意識の育成〟は15年戦争と共に，天皇制国家→家→個人へ逆流し，やがて，〝皇国民意識〟の形成へと向けられる。そして遂に昭和18年中学校令で，公民科は廃止され，国民科修身の中に完全に埋没していく。

私達は戦前，実補の教師が不備な教育条件の中で，少しでも社会科学的な客観認識と，公民として，社会にどう生きるかを農村や，都市の夜学で青年たちに教え，共に学習した先輩のすぐれた教育実践を知っている。同時にそのことから，今後の後期中等教育の中で

社会科教師が果すべき役割と責任を自覚したいと思う。

私達は社会科における教科構造を問題にするとき，単に社会科内部の分野，教科目の時間配当や教材配列に倭小化することを最大限に戒めたい思っている。

同時に「社会科の構造化論」に見られたような，皮相な図式や，形式的なカリキュラム一覧表を作成することを意図するものではない。文部省検定済のできあいの教科書を批判的にどうこなすか。細分化され，バラバラになり勝ちな社会科各分野・科目の関連構成を統一的な視点でどのように捉えるか。中・高社会科を一貫的に体系づける原理と具体的展開はどうしたらよいか……。

これらの検討はさらに長期的な見通しと，依然として試行的な実践研究に止まるかも知れないが，上からの要請ではなく，生徒の目と教師主体の教え甲斐を基盤にして，何を，どう教えるかを考えるための一ステップだと考えている。

一応，社会科教官全員で問題を出し合い，将来の構想として作成した，中一高，社会科カリキュラム試案（大綱）をかかげると次のようになろう。

第2表　全体の構成

（構　想）

学年／時間	7（中1）	8（中2）	9（中3）	10（高1）	11（高2）	12（高3）
1	地理的分野（日本）（世界）		政経社分野	倫社		政経
2				地理		
3	歴史的分野（日本）				歴史（日本と世界）	現代史
4	（世界）		現代史			
5						
6						
7	（選択）現代日本の社会問題					（選択）

（週当り時間）

（現　行）

学年／時間	7（中1）	8（中2）	9（中3）	10（高1）	11（高2）	12（高3）
1	地理的分野（日本）（世界）	歴史的分野（日本）	政経社分野	地理	倫社	政経
2						
3					日本史	
4		（世界）				
5					世界史	
6						
7						
8						（選択）

◦主題「社会に生きる人間の発展と課題」

◦各学年の主題

7（中1）　日本人の生活舞台と歴史

8（中2）　世界の中の日本

9（中3）　現代社会と人間

10（高1）　環境と人間

11（高2）　世界史の中の人間と国家

12（高3）　現代社会と我々の課題

以上の構想は全くの粗案であるが，次年度以降において，社会科の共同研究として肉づけをしてゆきたいと考えている。

本年度は従来も続けてきた「社会科における教科構造の検討」として，次のように分担することとした。

地理，「社会科における郷土学習の展開事例」

歴史，「歴史教科構造の問題点」

倫社，「倫社学習指導の実践的研究」－9か年の総括

政経，「政経の教科構造の検討と授業の改善」(高森)